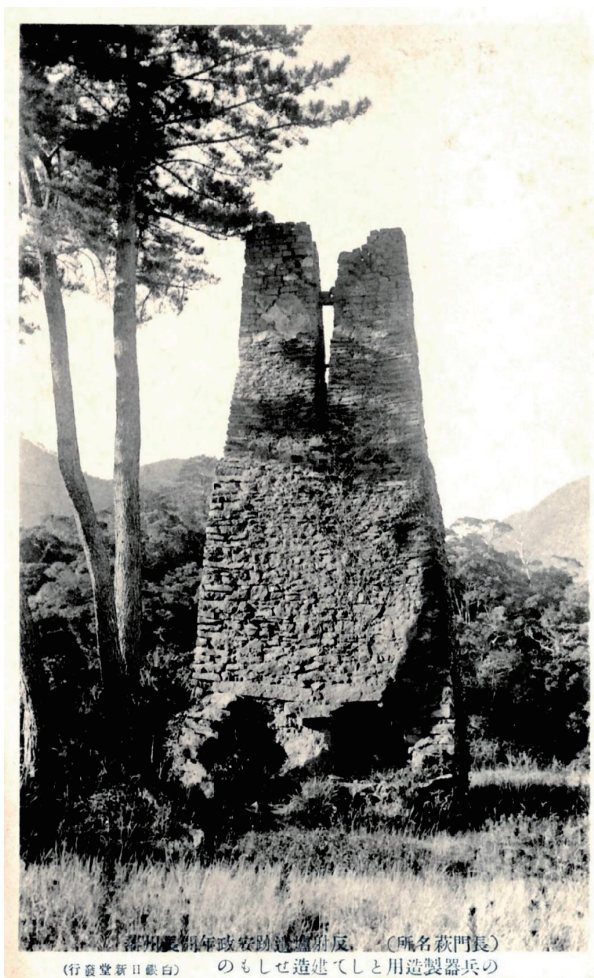


反射炉



長州藩長門安政3年造る反射炉（長門萩名所）
（白黒写真）の遺跡を造るにせよとて造る兵器製造の

* 文書館図書726-58-312

「絵はがき 山口県萩史跡・反射炉遺跡」

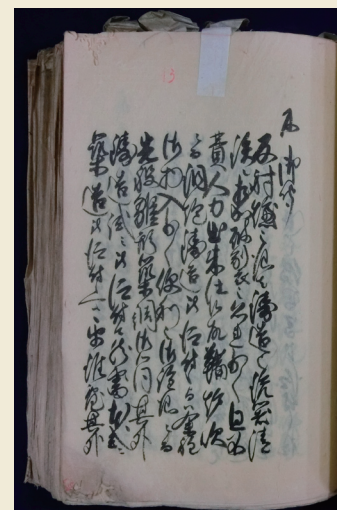
解説

反射炉は高温で鉄を精錬することのできる溶解炉です。大砲などの製造には反射炉で精錬した質の良い鉄が必要でした。

オランダからもたらされたこの技術を導入し、初めて実用化に成功したのは肥前藩です。幕府は肥前藩との技術交流により葦山（静岡県）に反射炉を築き、また薩摩藩などでも、外国船に対する軍備を強化するために、反射炉が作られ大砲などが製造されました。

写真は現在も萩市に残る反射炉の大正時代ごろの姿です。近年、この反射炉は実用炉ではなく、大砲を鑄造し軍備増強を目指す長州藩が肥前藩の反射炉を手本に試験的に作ったものであったと考えられています。

2015(平成27)年7月、この反射炉は「明治日本の産業革命遺産—製鉄・製鋼、造船、石炭産業—」の一つとして世界文化遺産に登録されました。



* 写真上は毛利家文庫「部寄」の1856(安政3)年の記事で、長州藩の反射炉が本式のものではなく「雛形」(試作)であったことが記されています。資金難により本式の反射炉の建設は断念されました(毛利家文庫32部寄4[安政3年11月19日])。